

学生舞踏競技25年の歩み

小 倉 清

目 次

はじめに

社交ダンスのおこりと変遷

鹿鳴館の社交ダンス

戦後の社交ダンス

現代の社交ダンス

競技ダンスについて

学生舞踏競技の誕生

学生舞踏連盟の発足とその背景

六大学戦の開始と大学対抗戦（1955～1959）

全日本学生舞踏連盟の再発足

連盟（学生舞踏）の抱える問題点

結 び

は じ め に

昭和23年、初の学生コンペであり、学生舞踏競技（学生ダンス）の基礎ともいうべき早慶対抗戦が開かれ、翌24年から学生連盟主催の競技会が開催された。それは戦後まもない混乱の日本に今日の連盟の基礎とも言うべき学生ダンスの種子がまかれ、社会の偏見と幾多の苦難との戦いの中で正しい競技ダンスと、正しい社交ダンスを普及していった偉大な足跡であった。

昭和36年より一般ダンス愛好者の増加と、競技選手の増大、各校組織の充実、そして除々に一般の支持を得るに到り、新たな発展段階を迎え、従来競技会の開催のみを目的にキャプテン会議の名の下に責任校制度を中心に運営されて来た学生舞踏競技連盟を「学生ダンスの為に、学生ダンス界の総力を結集して」のスローガンで全国的な

一本の強固な組織の下で組織的、継続的な活動をすべく、全日本学生舞踏連盟として昭和37年再発足をした。丁度今から10年前になるわけであるが、再発足当時は全日本といっても関東地方の大学がその大部分で、他には関西に数校活動している程度であった。その後の撓まぬ努力により加盟校も増え、現在 200 校近くの大学がその傘下であり、下部組織として、北海道、東北、東部、西部、九州の各連盟に別れ、名実共に全日本の連盟として組織が確立されている。

昨年(1971年)は初の早慶戦によつて始まった学生ダンス発足25周年に当り、また連盟が新しく全日本学生舞踏連盟として昭和37年再発足して丁度10年ということで10月17日、日本大学両国講堂に於いてその記念ダンスフェスティバルが盛大に行なわれた。

昭和37年に連盟が再発足してから今年で10年になるが、この間に連盟もいろいろと発展をとげている。東部日本に限ってみても、再発足当時14校であった加盟校も今や43大学に増加し、昭和38年にはリーダーズキャンプが始まり、またこの年にアマチュア規定が決定されている。昭和40年には連盟のオリエンテーションが開始され、41年には学生パートナー規定が確立し、学生舞踏は名実共に学生による競技舞踏になった。東部日本戦、4種目戦、新人戦、学年別戦が開かれるようになったのもこの10年間で、そして昨年からはラテン2種目戦も始められた。

斯様に学生舞踏連盟は目覚ましい変化、発展を遂げてきた。そしてこれからも学生舞踏の理想を求めて限りない前進をしていくことであろう。是非そうあって欲しいものである。学連はプロの競技団体との一時的対立にも又学園紛争にもわざわざされず、全国的組織にまで拡大し、名実ともに全日本学生舞踏連盟の名にふさわしい競技会が催されていることは本当に喜ばしいことである。しかし隆盛の一途をたどっている学連にも問題がないわけではない。組織が大きくなればなつたで又新しい問題がおこってきている。即ち競技会の開催、連営の問題、(場所の件、また現在のように大世帯になった連盟の競技会をどのように運営していくかの問題) パートナー規定の問題、競技会のもち方に関する問題(プロバンドを使っている点、プロ審査員による審査という点) 練習に関する問題(現在、各校選手達は殆んど教習所においてレッスンを受けている、それにともない多額の費用のかゝる点)、等々。列挙すれば限りない。

学生舞踏が始まって20余年の月日が流れた現在、「学生舞踏はどうあるべきか」の一つの反省期にきているといえよう。「学生の手による学生の舞踏」の旗印のもと発足した舞踏連盟、これは余り他に類を見ないすばらしさである。この健全性を何時までももって、もっともっと飛躍、前進を続けて貰いたいと願わずにはおられない。

ところでこのような変革の流れの中における25年目という一点、すなわち昭和47年

現在において、連盟がどのような道を歩んできたか、又現在における学生舞踏界はどうか、そして今後どのような道を歩もうとしているか、歩まねばならないかを考察してみたい。したがってその発生から発達、発展の経過について明らかにするのが本稿の目的である。

社交ダンスのおこりと変遷

社交ダンスは中世末期から近代にかけてフランスで行なわれていた宮廷舞踊から生まれたものであるというのが通説になっているが宮廷舞踊から生まれたと言うよりは宮廷舞踊そのものが古典的な社交ダンスへと発展してきたのである。

今日の社交ダンスは20世紀初期に形成されたもので、ワルツがその最初のもので伝えられている。ワルツの踊りはフランスで始められたものでフランスからドイツに輸入され、シュトラウス父子の影響を受けてウイナワルツの形式が生み出され、1920年以後に今日のテンポをもったワルツに変化してきた。

フォックストロットは1915年頃、ニューオーリンズの黒人社会で行なわれていた踊りにヒントを得て、キャッスル夫妻によって今日のフォックストロットの形式がつくられたといわれている。

タンゴは1920年以後において、アルゼンチンのブエノスアイレスの人たちによって踊られたフォークダンスがパリに紹介されてから、この踊りにヒントを得て今日のタンゴの形式をつくったのである。

またブルースはアメリカの黒人が奴隷解放以前から歌っていた哀情のこもった歌をジャズ化したもので、この曲に社交ダンスの形式を整えたものといえよう。

その他にもいろいろな形式をもった踊りがあるが、ワルツ、タンゴ、フォックストロットは社交ダンスの中核をなすもので社交ダンスの歴史の上に残るものであろう。

そしてこれらの社交ダンスは西洋の社会生活に親しみをもって迎えられ、日常生活の中に溶けこんで来ている。

鹿鳴館の社交ダンス

1883年、政府の高官や貴婦人たちにより、鹿鳴館において舞踏会が盛んに行なわれた。政府の欧化政策として現われたのが鹿鳴館であり舞踏会であった。鹿鳴館は東京日比谷に建てられた上流の社交クラブとして使用され、ここでしばしば舞踏会が開かれていた。この当時の社交ダンスは宮廷舞踊的な社交ダンスで、この影響で上流階級によって組織されていた学校などでこのような社交ダンスが行なわれていた。それが

当時としては一つのモダンな象徴であったようである。鹿鳴館のダンスは政治的な事情で1889年に禁止された。それから30年後にアメリカからフォックス、トロットが移入されるまで社交ダンスは行なわれなかった。

戦後の社交ダンス

日本の健全な娯楽舞踊はフォークダンスやスクエアダンスから始まったと言っても過言ではない。戦後の荒廃した日本の状態では、ぜいたくな娯楽を求めることは出来なかった。幸いにも占領軍政策の一つとしてフォークダンスやスクエアダンスがレクリエーションのために奨励されたので、学校・職場などで盛んに行なわれるようになってきた。

社交ダンスも戦後の娯楽舞踊として急速に普及した。そして1946年（昭和21年）には全国で邦人用の舞踏場の数は約200に達し盛況を極めた。

しかし翌22年には税金の関係でこれらの舞踏場の大部分がキャバレーに切替えられ、社交ダンスは舞踏場から姿を消し、誤解をまねき易い姿に変わってきた。

一方、社交ダンスはその普及により学校、職場、家庭に健全な姿で盛んに行なわれるようになったが、社交ダンスに対する社会認識の曲解が、このような健全な社交ダンスの発展に幾度かつまずきを与えてきた。勿論、若い世代の人々の中には誤解され易い行動もあったが、それは過渡的な現象であった。

現代の社交ダンス

現代の社交ダンスは社交的な性格が主となる場合と、娯楽が主となる場合やスポーツを主とする場合などのようにその目的によって同じ形態のものが自ら異なってくるのである。社交ダンスの本当の性格はどこまでもお互の親睦を深めるための娯楽的なもので、スポーツ的な性格は現代の現象である。

戦後日本で盛んに踊られているジルバは戦前アメリカで流行したジターバッグを占領軍（駐留軍）兵士によって紹介されたものである。ジターバッグが、なまって日本ではジルバと呼ぶようになった。ジターとは神経質に身体をふるわせることで、バッグは虫の意で、「身体をふるわせた虫」をアメリカ黒人がみて踊りにとり入れたのが「ジターバッグ」の踊りである。その他にもキューバの民族舞踊からルンバが、ブラジルの民族舞踊からサンバなどが社交ダンスにとり入れられたが、現代の社交ダンスの主流はワルツ、クィック、タンゴが世界共通の社交ダンスとして通用するものであろう。

現在社交ダンスの普及は学校、職場、家庭などで行なわれているが、なんといっても社交ダンス教授（教習）所からの普及力が大きい。昭和30年の統計によれば東京には620、大阪200、その他全国で600のダンス教授所が数えられるのをみても如何にその普及力の大きいかが理解できる。そして全国で5,000人以上のダンス教師が社団法人日本社交舞踊教師協会（会長、藤村浩作）と日本舞踊教師協会（会長、玉置真吉）との2つの協会の中に属している。

競技ダンスについて

社交ダンスは男女交際の場合から、大競技場で「わざ」を競う、競技ダンスにまで発展してきた。

外国では今から約300年前、ルイ王朝時代から、日本では明治初期、鹿鳴館時代まではポルカやマズルカなどのシークエンスダンス（はじめからステップを順番に組み合わせたダンスでフォークダンスもこの部類）だった。しかしウイナワルツを契機に、男子が音楽に合わせて自由に右・左に回ってリードをする様式に変化してきた。これをノンシークエンスダンスといい、今日の社交ダンスとなっている。そしていかに相手を上手に踊らせるか、また、いかに2人のカップルが一体となって動けるかを研究開発したのが競技ダンスである。

日本の競技ダンスは、近々20年の間に急速な発展をとげ、毎年各国もち回りで開催される世界舞踊競技大会に日本からも参加し、つねに上位をしめてきた。そして、1969年5月、イギリスでの競技会では、強豪西独、チームを押え、2位に進出した。

〔種 類〕

社交ダンスを大別するとモダン種目とラテン種目の二つに分けられる。

モダン種目……ワルツ（遅いワルツ）、フォックストロット（ブルース）、クイックステップ（速いフォックストロットの曲）、タンゴ、ウイナワルツ（速いワルツ）の5種目。

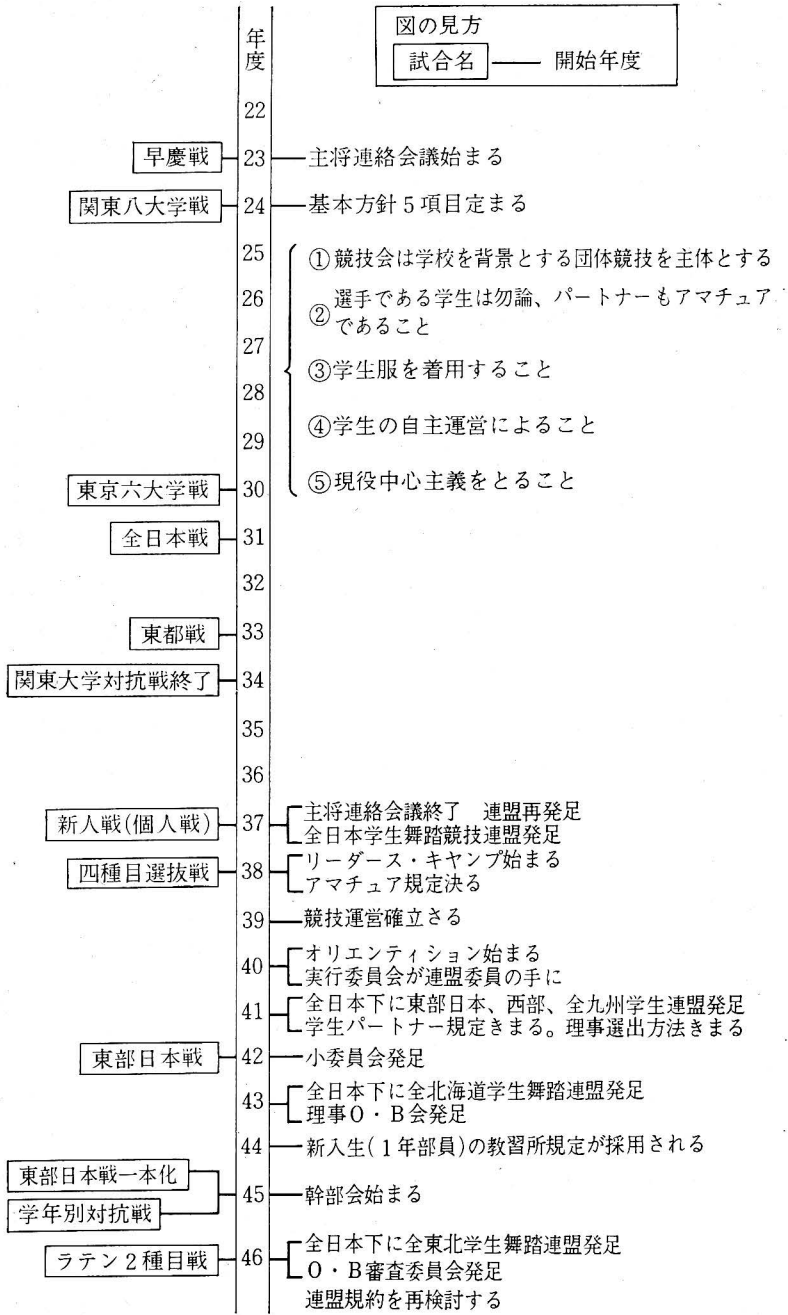
ラテン種目……ルンバ、サンバ、パソドブレ、ジャイブ（ジルバ）、チャチャチャの5種目。

競技ダンスの採点は、体操競技やフィギュアスケートなどに行なわれるが、スケートティングシステムで、審査員によって厳正に行なわれる。競技ダンスは一定のルールの中で最大限の効果を出すために、ボディスウィングによるフライトとスピード、強靱な脚力とコントロールなどが要求され、一曲の踊りは大変な運動量になる。

国内で行なわれる春秋2回の大競技会では、決勝に残る選手は5ラウンド50曲を精

学生舞踏競技25年の歩み

表1 学生舞踏25年の歩み



根をつくして踊り抜くので、パートナーが貧血で倒れたり、脚部の痙攣（けいれん）を起す組が毎回2～3組は必ず出るほどである。

学生舞踏競技の誕生

昭和初期に導入された英国風のボールルームダンスがわが国で実を結んで、競技ダンスが盛んになってきたのは昭和5～10年頃であるが、その競技はアマチュアが主体であってプロも混入しているオープン形式のものが大部分で、パートナーは勿論プロに限られていた。選手達は所属の名誉のために激しい訓練を積んで、華やかな競技がくり広げられた。当時は学生でも社会人であってもその差はなく、勿論、学校を背景とする応援などはみじんもなかった。その後戦争の進展とともに競技ダンスは圧迫されて影をひそめ終戦を迎えた。

戦後、進駐軍の進出とともにダンスは、はなはだしく復興をみせたが、アメリカ風のジルバなどが主流であったが、一方にこれにあきたらず技術の練磨を志す競技ダンスは戦前からの選手たちのカムバックによって次第に盛んになり、当時、織田（旧中村）選手などが初期のチャンピオンとして活躍した。

昭和23年からフロリダで早慶戦が開かれたのもこのような背景であり、学生が燕尾服を着てイブニングの女性（勿論プロであった）と踊るといので、写真入りで「親泣かせの早慶戦」と新聞がとりあげたのもこの頃のことである。当時は食糧も衣料も十分でない世相の中で、親からの送金で暮すはずの学生がそのような華やかな場に入りびたってよいかという意味が含まれていた。

また、品川のパラマウント舞踏場ではホール主催の学生競技会が催され、勿論パートナーはダンサーとか教師夫人などであり、学生の組織は一切関与しないものであったが、当時活躍していたのは日大の木村選手などであった。

学生舞踏連盟の発足とその背景

全日本学生舞踏連盟会長であり連盟の生みの親の一人である東大教授星野昌一氏は連盟誌「東舞」創刊号に1949～1954の間を学生舞踏競技の第一期とし当時のことを次のように語っている。「このような背景では学生競技が正しく育たないといので、当時パラマウント舞踏場の支配人をしていた川北長年氏と計り、当時東大に集団指導に来ておられた原潔氏、教師協会の会長をしておられた池原氏、その頃元気でおられた旧師吉田庄太郎氏などと相談の上、学生競技会を学生らしい姿で行なう母胎となるべき学生競技連盟の発足の準備をいたしましたのである。旧知の四本氏、中原氏、助川氏、

学生舞踏競技25年の歩み

市村氏、市川氏、山家氏らも心から賛意を表され、教師協会が技術的なバックボーンとなって、学生の企画・運営による競技会の開催の方向づけができてきたのである。

当時慶応では中心メンバーとして難波君が活躍していたし、立教の白石君などもこれを追うものとして目立っていた。その他早稲田、明治、中央、東大などの学生選手たちに呼びかけて、しばしば会合を開き、ともかく第一回の競技会を昭和24年パラマウントで開くことになった。」と。

従来の競技会と根本的に違う点は、あくまで学校を背景としたアマチュアとしての姿勢を貫くことであり、つぎのような基本方針を提案してこれが骨子となったことである。

即ち、

- (1) 競技は学校を背景とする団体競技を主体とすること。
- (2) 選手である学生はもちろん、パートナーもアマチュアであること。
- (3) 学生服を着用すること。
- (4) 学生の自主運営によること。——これは当然のことであるが、発足当時としては仲々無理な点があった。早、慶、東にはすでに学生組織がつくられていたが、その他の学校では選手が個人的に参加しているに過ぎず、その選手が卒業するともう後継者が居ないなどという状態のところもあった。

会場の交渉、ポスターの作製、プログラムの編成までかなりの手間を要し、当初は会長が文字通り陣頭指揮で学生役員一丸となってこの苦しい期間を耐え抜いた。

- (5) 現役中心主義をとったこと。

多くの学生競技の背景には強力な先輩団の支援があり、伝統的な圧力が学生に加えられていて封建的な匂いがするのを見かけるので、あくまで中心となる人々は現役の学生に限るという組織づくりをすすめてきた。これは画期的なことでありこれが今日の学生連盟の活躍につながっているといえよう。

以上のような企画、運営によって学生の手になる学生競技会が毎年春秋二回開かれるようになり、次に挙げるような成績が續が續けられてきた。

関東学生選手権大会（第1期）

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
第1回（1949）	慶 応	立 教	（早大、中大）		明 治	東 大
第2回（1950）	早稲田	中 大	東 大	立 教	明 治	慶 応
第3回（1950）	慶 応	（東大、早大）		（立大、中大）		明 治
第4回（1951）	早稲田	慶 応	東 大	中 央	明 治	工学院
第5回（1951）	早稲田	慶 応	明 治	中 央	東 大	法 政

小 倉 清

第6回 (1952)	早稲田	慶 応	明 治	東 大	立 教	専 修
第7回 (1952)	慶 応	明 治	早稲田	立 教	日 大	中 央
第8回 (1953)	慶 応	立 教	東 大	早稲田	日 大	明 治
第9回 (1953)	早稲田	立 教	明 治	東 大	日 大	法 政
第10回 (1954)	明 治	早稲田	日 大	立 教	工学院	専 修
第11回 (1954)	明 治	慶 応	法 政	早稲田	東 大	日 大

以上が六大学戦が開かれる以前の第一期関東大学対抗競技会時代のことであり、審査員は日競連の特別の厚意もあって、藤村氏以下の賛同を得て玉置、四本、原、吉田、中原、田中、永吉、助川、山家氏等一流どころをそろえ、学連側から会長である星野昌一氏（東大教授）、現東部日本連盟会長である伊藤安二氏（早大教授）、また現参議院議員である松下正寿氏等も審査に加わった。この当時活躍された選手達のいく人かはプロに入ってその後活躍し、また現在、学連の競技会に審査員として来られている。

六大学戦の開始と大学対抗戦、(1955～1959)

関東に所在する大学すなわち東京六大学の他に中央、日大、専修、工学院などの常連をまじえた関東大学対抗戦は1955年以後も春秋二回ずつ開催されて、引きつづいて学生連盟の行事の主軸として続けられていた。

関東学生選手権大会（第2期）

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
第12回 (1955)	早稲田	東 大	法 政	日 大	慶 応	明 治
第13回 (1955)	早稲田	慶 応	法 政	日 大	明 治	専 修
第14回 (1956)	早稲田	立 教	慶 応	東 大	日 大	東農大
第15回 (1956)	慶 応	早稲田	立 教	日 大	法 政	東 大 (第1回全日本)
第16回 (1957)	早稲田	東 大	法 政	日 大	立 教	明 治
第17回 (1957)	早稲田	東 大	法 政	明 治	工学院	慶 応 (第2回全日本)
第18回 (1958)	早稲田	法 政	(工学院、東大、明大)			日 大
第19回 (1958)	明 治	早稲田	法 政	工学院	東 大	日 大 (第3回全日本)
第20回 (1959)	(早、明、立)			法 政	日 大	東 大
第21回 (1959)	早稲田	慶 応	明 治	立 教	法 政	日 大 (第4回全日本)

1955年

(春) スミダクラブで開かれた関東大学戦はW, T, H, N, K, Mの順位、このとき東大、初めて2位に進出する。

(秋) 大学対抗戦に六大学の他に専修、中央、日大、東教大が初めて参加する。春に引きつづき早稲田が優勝、W, K, H, N, M, Cの順、審査員は学連から星野、松下、伊藤、日教連から玉置、四本、山家、永吉、白川、塩見氏が出られ審査に当る。

学生舞踏競技25年の歩み

この年にフロリダからの呼びかけがあり、野球の六大学戦にちなんで、ダンスの六大学戦を開いてはどうかということで当分学生の正式の行事というよりは、むしろ早慶戦と同じように多少フェスティバル的なものとして一般の人気を集めようという企てであった。

連盟としては六大学以外の大学に不愉快な思いをさせない程度の軽い気持でこれに応じてはということになり、その第1回が12月17日に行なわれた、大学対抗で早稲田に押えられた慶応が見事優勝を得、雪辱を果たした。順位、K, H, W, R, T, Mの順。

表2 東京六大学学生舞踏選手権大会

		1	2	3	4	5	6	
第1回	1955	K	H	W	R	T	M	(フロリダ)
第2回	1956 (春)	W	T	K	R	H	M	(")
第3回	1956 (秋)	K	W	R	T	M	H	(")
第4回	1957 (春)	T	W	H	R	K	M	(")
第5回	1957 (秋)	W	T	H	R	M	K	(サンケイホール)
第6回	1958 (春)	W	H	M	T	K	R	(")
第7回	1958 (秋)	W	M	H	T	R	K	(")
第8回	1959 (春)	W	M	H	R	T	K	(")
第9回	1959 (秋)	W	H	M	R	T	K	(")
第10回	1960 (春)	W	R	H	T	K	M	(")
第11回	1960 (秋)	W	T	H	R	M	K	(")
第12回	1961 (春)	W	H	T	K	R	M	(")
第13回	1961 (秋)	W	H	K	T	M	R	(")
第14回	1962 (春)	W	T	K	H	R	M	(")
第15回	1962 (秋)	W	T	M	R	K	H	(後樂園ジム)
第16回	1963 (春)	W	T	H	K	R	M	(リキバレス)
第17回	1963 (秋)	W	T	M	H	R	K	(")
第18回	1964 (春)	W	T	K	M	H	R	(")
第19回	1964 (秋)	T	W	K	H	M	R	(後樂園ホール)
第20回	1965 (春)	T	W	H	K	M	/	(")
第21回	1965 (秋)	W	T	H	K	M	R	(")
第22回	1966 (春)	T	W	H	K	R	M	(")
第23回	1966 (秋)	T	K	W	H	M	R	(")
第24回	1967 (春)	K H		W	R	M	/	(")
第25回	1967 (秋)	H	T	W	K	R	M	(")
第26回	1968 (春)	H	T	W	K	M	R	(")
第27回	1968 (秋)	H	T	W	M	R	K	(")
第28回	1969 (春)	H	W	M	T	K	R	(")
第29回	1969 (秋)	H	W	K	T	M	R	(")
第30回	1970 (春)	H	W	T	K	R	M	(")

小 倉 清

第31回	1970 (秋)	H	T	W	K	M	R (後樂園ホール)
第32回	1971 (春)	H	W	T	K	M	R (")
第33回	1971 (秋)	W	H	T	M	K	R (")

1956年

(春) 大学対抗戦は東工大、農大などの参加を得て11校で行なわれる。今日の日本選手権に活躍している篠田選手(ワルツ個人優勝)を擁したW大は引続いて優勝。第2回六大学戦(於フロリダ)はW大が一致団結してK大に当り、個人的には絶体的には優位にあったK大の村木(タンゴ優勝)、細金(ワルツ優勝)を押えて見事に団体で優勝。

(秋) 第3回六大学戦は初めて四種目で戦われ、K大が再びW大を押え優勝する。以下、R, T, M, Hの順。

この年初めて京都からの参加を得て、全日本の形をとった舞踏競技会がフロリダで開かれた。この競技会で山本、村木を擁したK大は、W大を押え優勝、3位R、4位N、5位H、6位T、の順となる。関西側は同志社が2人の選手を出場させたが力の差、如何ともし難く11位に甘んじることになった。なお、この際、京大、立命大、関西大が見学の形で参加したことは注目に価する。

1957年

(春) 六大学戦はやはり4種目で戦われ、意外にも東大が初めて優勝して大番狂わせを演じた。2位W、3位Rの順。関東大学対抗はワルツとタンゴの2種目で東工大、農大などを含む11校で戦われ、W大が再度優勝をさらった。以下T, H, N, R, Mの順。

(秋) 六大学戦はW大が優勝し、再度優勝の期待をもっていたT大を2位に押えた。以下、H, M, R, Kの順。

全国的な対抗戦となった秋の全日本戦はサンケイホールで行なわれ、再び同志社を含み工学院大、東工大、理大、千葉工大、農大などを含む14校で争われ、W大が再び優勝を飾り、T大は2位、H大3位、M大4位、工学院大5位、東工大が6位に入り、同志社は10位となった。

1958年

(春) 六大学戦はW大の連続優勝、以下、H, M, T, K, Rの順。

東日本学生対抗は再びW大が優勝の座を獲得。2位にH大、3位に工学院大学が初めて進出して注目を浴びた。4位にT大とM大、6位はN大が続いた。

(秋) 六大学戦は再びW大が優勝をつづけ、これを追って久し振りに2位に進出し

たM大の活躍がたたえられる。以下、H, T, R, Kとつづいている。

全日本戦は新たに武蔵工大、立正、青学などが参加して12校で争われたが、ここで初めてM大が優勝の栄冠をかちとる。2位以下、W, H, 工学院大, T, Mの順。

第10回早慶戦はW大がK大を押え、再び優勝し、今までの対戦成績、W 6回：K 4回とする。

1959年

(春) 6大学戦 W, M, H, R, Kの順位。

東日本戦は前回の優勝校M大を押え、W大が1位を奪い返し、これを追うM大がR大と同点でおしくも共に2位となった。4位H大、5位はN大、6位はT大とつづく。

(秋) 全日本戦は持駒の多いW大が連続優勝し、しばらく鳴りをひそめて機会の到来を伺っていたK大が4年振りに2位におどり上った。3位M、4位R、5位H、6位N大の順。

第11回早慶戦はW大が再びK大を押えて7勝4敗とその差を開いた。

秋の六大学戦はW, H, M, R, Tの順、K大はこの回は棄権した。

第2期の学連競技会はこのように関東対抗から東部日本に、そして関西を加えた全日本の形に成長して春秋2回の対抗戦を行なっていたほか、新たに六大学戦が誕生して、六大学の所属選手は年4回の競技に出場し、さらに早慶戦も学生連盟の後援の形をとったので、なかなか多忙な開催日程を組む形となった。

この頃は各校につきつぎと若手の有望選手が育ち、数年間の連続優勝の形をとるなどようやく地についた学生競技の姿が華々しくうき彫りされるようになった。

戦時中閉ざされていた海外との技術交流も1948年(昭和23年)頃から豊富な文献が流入して新技術の確立が盛となり、その成果が1955年頃から日本のダンスの様相を一変した時代であり、若い人達の旺盛な咀嚼力によって千変万華の成果が披露され、競技会は内容的にみても一段と充実したものになったわけである。

学連の組織も次第に充実して、京都など関西側との交流もはじまり、学連の会合もひんぱんに行なわれるようになった。

しかし六大学戦が段々と華やかになるにつれ、六大学以外の大学にわだかまりを与えたことは反省すべきことであり、やがて『東都大学』という別の組織づくりが行なわれるようになったことは学連の在り方に対するよい教訓であった。

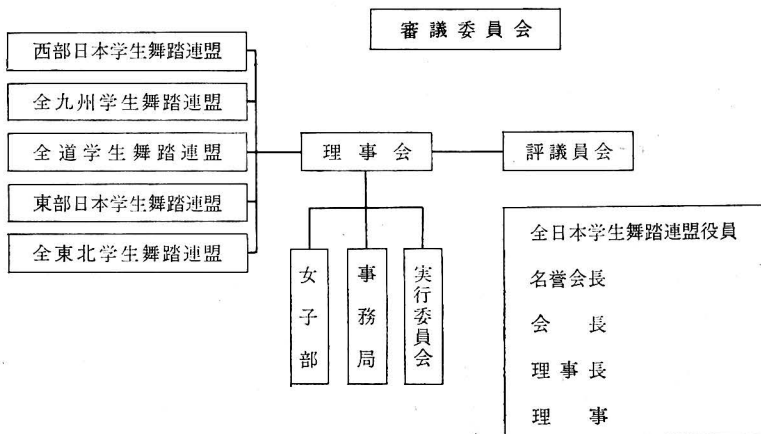
そして1949年以来、つづいた大学対抗戦はここで終了の形をとり1958年から出来た東都大学戦と55年年から始った六大学戦とに分れそれぞれ戦われた。

小 倉 清

表 3 東都大学学生舞蹈選手権大会

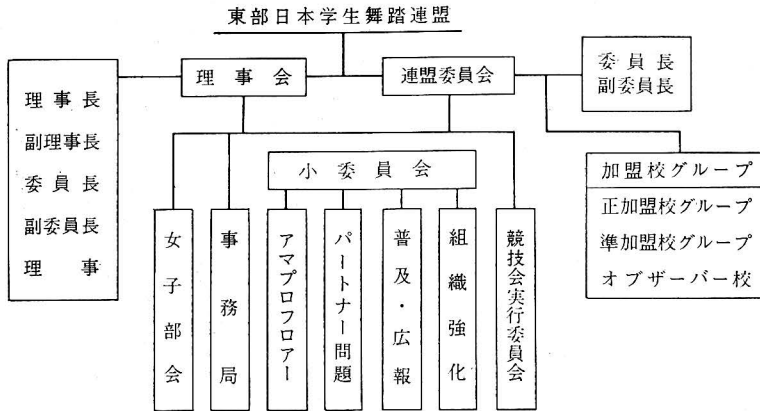
	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
第1回1958(秋)日大	工学院大	青学大	理大	立正	武蔵	
第2回1959(春)日大	工学院大	立正	千葉	東工	中	央
第3回1960(春)日大	工学院大	千葉	東工	東農	／	
第4回1961(春)工学院大	日大	千葉	東工	成蹊	東農	
第5回1962(春)工学院大	日大	千葉	東農	都立	東齒	
第6回1962(秋)日大	工学院大	東農	千葉	青学大	中	央
第7回1963(春)工学院大	日大	中央	電通大	埼大	千	葉
第8回1963(秋)工学院大	日大	中央	電通大	青学大	武	美
第9回1964(春)工学院大	日大	中央	電通大	横国大	青学大	
第10回1964(秋)工学院大	中央	日大	電通大	東洋	青学大	
第11回1965(春)日大	工学院大	中央	青学大	横国大	東洋	
第12回1965(秋)日大	中央	工学院大	青学大	電通大	東洋	
第13回1966(春)中央	日大	工学院大	電通大	東洋	青学大	
第14回1966(秋)中央	工学院大	電通大	日大	東洋	専修	
第15回1967(春)中央	東工	工学院大	日大	東洋	外大	
第16回1967(秋)中央	日大	東工	東洋	工学院大	専修	
第17回1968(春)中央	東工	日大	東洋	青学大	独協	
第18回1968(秋)中央	日大	東工大	工学院大	理大	専修	
第19回1969(春)日大	東工大	独協	東洋	独協	工学院大	
第20回1969(秋)中央	日大	東工大	独協	東洋	工学院大	
第21回1970(春)中央	日大	東洋	東工大	専修	独協	
第22回1970(秋)中央	日大	専修	独協	東海	工学院大	
第23回1971(春)日大	専修	独協	中央	東洋	電機	
第24回1971(秋)日大	専修	東洋	中央	独協	東海	

表 4 全日本学生舞蹈連盟組織



学舞生踏競技25年の歩み

組 織 図



全日本学生舞踏連盟の再発足

1960年頃の学生舞踏界は早稲田大学の黄金時代で総ての競技会に優勝し、技術的にも組織力に於ても他校をリードし、文字通りの黄金時代を迎えつつあり、連盟の中でも中心的存在であった。55年から始まった六大学戦、58年から行なわれるようになった東都戦と二本立てになり、連盟の雲行きもやや分裂の傾向にあったこの組織を何とか建直すべく必要にあった。1962年早稲田大学選出の清水連盟委員（後の全日本舞踏連盟初代理事長）が中心となり、組織的には有名無実であった連盟を将来の発展と後輩のより有意義な活動の為に組織の基礎を確立することを提唱し、この趣旨に賛同し積極的に活動していた早大の永井氏、東大の小林、遠藤両氏、立大の大石氏、日大の秋山氏、工学院大の岩瀬氏等が選出され、全日本学生舞踏連盟設立委員会が設けられ組織づくりに着手した。

その大要は清水氏によれば、『近年一般ダンス人口の増加とそれに伴う学生選手の増大、各校舞研の組織の充実、併せて広く一般の支持を獲得するに至り新たな発展段階を迎え、従来競技会の開催のみを目的に責任校制度を中心に運営されてきた学生連盟を『学生ダンス界の為に学生ダンス界の総力を結集して』のスローガンのもと全国的な一本の強固な組織の下で組織的な活動をするべく新しい「全日本学生舞踏連盟」として再発足をした。』と述べている。そしてその機関は、学連委員会、理事会、実行委員会、審議会、事務局を設置し、当初活動が軌道に乗るまでは理事会が連盟運営の総ての事項につき企画立案し、委員会の承認の下に連盟を指導し運営を続けて行

表5 全日本学生舞踏選手権大会成績

		第1位	第2位	第3位	会 場
第1回	1956	慶 応 大	早稲田大	立 教 大	産経ホール
第2回	1957	早稲田大	東 京 大	法 政 大	〃
第3回	1958	明 治 大	早稲田大	法 政 大	〃
第4回	1959	早稲田大	立 教 大	明 治 大	〃
第5回	1960	早稲田大	法 政 大	東大、日大	〃
第6回	1961	早稲田大	法 政 大	慶 応 大	新宿体育館
第7回	1962	早稲田大	東 京 大	工学院大	日 大 講 堂
第8回	1963	早大、東大		工学院大	〃
第9回	1964	東 京 大	早稲田大	慶 応 大	〃
第10回	1965	早稲田大	東 京 大	慶 応 大	〃
第11回	1966	法 政 大	早稲田大	東 京 大	武 道 館
第12回	1967	東 京 大	法 政 大	早稲田大	日 大 講 堂
第13回	1968	法 政 大	東 京 大	早稲田大	〃
第14回	1969	法 政 大	早稲田大	東 京 大	〃
第15回	1970	法 政 大	東 京 大	早稲田大	〃
第16回	1971				
第17回	1972	(未 定)			

った。各理事はそれぞれ仕事を分担しその任に当った。連盟運営に当り、特に意図したことは、

- ① 全日本学生舞踏連盟として名実共に全国的な組織の確立。
- ② 全国的組織を活用し、競技ダンスと共に健全な社交ダンスを普及し、社会の偏見を排除する。
- ③ 各競技会の組織的且つ充実した運営開催。
- ④ 選手層の拡充のために新人戦を創設する。
- ⑤ 女子部員の地位、及び技術の向上を計り、女子大を連盟参加させる。
- ⑥ 「全日本学生舞踏連盟規約草案」の作成。
- ⑦ 自主独立の運営をめざし、学連の一本立と地位の向上。
- ⑧ 学連として真のアマチュアリズムの確立と実行。
- ⑨ アマチュアスポーツとしての学生コンペの確立とアマチュアダンス道の育成。
- ⑩ 個人の名誉を満足させるだけの個人競技を排し、学校単位の総合点によって優劣を競う団体戦を原則とする。等であった。

当時の新らしい活動の中で、とりわけ注目されることは、舞踏連盟結成の働きかけを、全国の大学に向けて行なったことである。その結果、全国のダンス状況が明らか

となり、全日本連盟への組織拡充の気運が、ここで一層高まった。

早速、6月に新宿四谷公会堂で第1回の新人戦が開かれ、以後、春はワルツ、タンゴ、秋はスロー・クイック、に分けて行なわれることになった。新人戦は、選手層の拡充と新人の技術向上、新人の発掘、未開拓校の選手の発見と、より多くの参加者と参加校を得るために個人戦とした。この年（1962）までの加盟校14であった。

1963年

この年初めてリーダーズ・キャンプが将来の学生ダンスの発展を考える場として開かれた。この第一回のリーダーズ・キャンプでは、学生のアマチュアリズムについて論ぜられ、かなりの成果を上げた。尚、この年より全日本学生選抜戦がもたれる。通称4種目戦とも呼ばれるもので学生ダンス界のチャンピオンを決する最もレベルの高い競技会である。

1964年

競技会の運営方法確立される。

1965年

第一回オリエンテーションがこの年より始まる。

全日本学生舞踏連盟の主催により連盟の主催により連盟の全会員を集めた大総会が開かれた。又前年度に確立された競技会の運営方法により実行委員会の活動が理事の手から連盟委員の手に委ねられるようになった。12月、加盟校6校で女子部発足する。

1966年

全日本学生舞踏連盟の名の下に、東部日本、西部日本、全九州の3ブロックの連盟が発足した。この各ブロックが互に意見や活動内容を報告し合う正式な機関として評議員会がおかれている。また今まで懸案であった学生パートナー規定は、ほぼこの年に骨子がきまり、2年の準備期間をおいて実施されるようになる。

1967年

学生ダンスの懸案を細かく分析する機関として、小委員会がおかれる。

またこの年より東部日本戦が始まる。これまで東部日本では、東京六大学と東都大学は、個々の競技会を行なってきたがこの頃になると、両者の融和が顕著に見られ、両者が、一つの場でお互の技術を競い合えるような形を望む声が強くなった。そこで始まったのが、昭和42年秋の東部日本学生舞踏選手権である。この背景には、東都大学の膨張ということも含まれていた。現在、東部日本の加盟校が一堂に会して、何度も競技会を行なうことは非常に困難なことである。そこで、当時東部日本戦を実施するに際して、縦割り方式で二つに分けることが考えられた。

第一回 東部日本戦成績

	1 位	2 位	3 位
A	法 政	東 大	中 央
B	早稲田	慶 応	明 治

表 6 東部日本学生舞踏選手権大会

		1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
1967 秋 第1回	A	法 政	東 大	中 央	立 教	東 工	工学院
	B	早稲田	慶 応	明 治	電 通	日 大	東 洋
1968 春 第2回	A	東 大	早稲田	中 央	東 工	明 治	東 洋
	B	法 政	慶 応	工学院	立 教	青 山	独 協
1968 秋 第3回	A	東 大	早稲田	中 央	明 治	日 大	東 工
	B	法 政	慶 応	立 教	工学院	青 山	独 協
1969 春 第4回	A	法 政	早稲田	立 教	中 央	東 工	専 修
	B	慶 応	東 大	日 大	明 治	独 協	新 潟
1969 秋 第5回	A	法 政	早稲田	立 教	中 央	東 工	専 修
	B	慶 応	日 大	東 大	明 治	東 洋	独 協
1970 春 第6回		法 政	東 大	早稲田	中 央	日 大	慶 応
1970 秋 第7回		法 政	東 大	早稲田	慶 応	中 央	明 治
1971 春 第8回		早稲田	法 政	東 大	慶 応	中 央	明 治
1971 秋 第9回		法 政	東 大	早稲田	慶 応	明 治	日 大
1972 春 第10回							

1968年

全日本下に全北海道の連盟が発足する。又この年は学生舞踏20周年に当るのでそれを記念して日大両国講堂に於て記念行事が行なわれる。

1969年

この年から本格的な学生パートナー制が実施される。又1年部員の教習所規制が始められた。即ち1年生男子について、連盟準会員の間、教習所でのレッスンを禁止することがきめられた。この頃毎年新しく加盟する大学が数校にのぼり学連は年を追う毎に膨張していった。

1970年

今まで会場の都合で二つに分けられていた東部戦が、日大講堂が使用可能となったことに伴い、この年より一本化される。またこの年より東部では学年別対抗戦が開かれる。

1971年

連盟再発足10周年を記念して盛大に記念行事が行なわれた。またこの年より全日本下に全東北学生舞踏連盟が発足する。従って再発足10年にして東部(43校)、西部(20校)、全九州(13校)、東北(6校)、全道(4校)の各連盟を傘下とする文字通りの全日本学生舞踏連盟がつくられた。

現在行なわれている競技会

◎全日本学生舞踏選手権大会

学生舞踏競技大会の中でも、最大のそして最高の競技会である。北は北海道、南は九州までの全国の大学が集まり、モダン四種目に約200カップルが出場する。1種目に2人まで、又1人1種目限りの出場制限があり、他の競技会とは違った得点争いに興味が持たれている。又得点争いとは別に、劇的なフィナーレが行なわれ、一瞬涙をさそうようなシーンが見られる。4年生は、学生生活最後の競技会であり一生の思い出として残るような大会。競技会終了後は各学校の親睦パーティーがあり、日大講堂に3,000余人もの人が集まり、全日本戦にふさわしい競技会といえよう。

◎全日本学生選抜舞踏選手権大会

通称4種目戦と呼ばれ、文字通り学生チャンピオンをきめる競技会である。各校から選ばれた4人が、それぞれ、モダン4種目を踊り順位によって、その学校の団体成績とするわけであるが、優勝を決める上位決勝戦ともなると、出場選手も相当疲労気味で、スタミナとも戦わなければならない苛酷な競技会とも言える。又4種目とも平均した技術を身につけていなければならない。

◎東部日本学生舞踏選手権大会

現在東部日本学生舞踏競技連盟には30数校の大学が加盟(昭和46年現在、正加盟校28、準加盟校10、オブザーバー校5校)しており全日本の中では最も大きな世帯である。このように数多い大学が一度に集まり競技会を催すことは非常に困難である。会場の点、日程の点等問題がある。これは東部日本学生舞踏競技連盟の中心的競技会になっている。

◎東部日本学生舞踏新人戦

ここ数年のうちにカップル数が約2倍に増え、出場カップル数400余組、会場さがしに又大会運営に頭を悩まされている。明日の学連を築く新人戦である。

◎東部日本学生舞踏ラテン戦

学生舞踏競技会、唯一のラテン戦。まだ歴史が浅く軌道に乗ったとはいえないが昨秋(第三回)の大会では出場219カップル。実に今後のラテンに光明をもたらした。

後援競技会

◎東京六大学舞踏選手権大会

以前は東部日本学生舞踏連盟主催の競技会であったが、東部日本戦という競技会が出来たため、後援試合になっている。

伝統もあり人気もあるが六大学の技術が接近しているので得点争いが激しく毎回話題を呼んでいる。最近年々派手になっていく傾向があるが競技運営面においてすばらしい競技会といえる。

◎東都大学舞踏選手権大会

六大学戦と同様にこの大会も後援試合となった。六大学に比較し、大会はかなり質素な感じを強くうける。しかし東都大学の名門校が名を連ね、実力が接近してきており、内容的にも興味のある競技会。

◎学 年 別 戦

各学校の学年を対象としているので、ハンディのない同学年による団体戦。

◎明法立大学対抗舞踏競技会

(明治大学、法政大学、立教大学)、三大学の親睦競技会。この競技会はモダン種目に、ラテン種目を加えた幅広い競技会に特色がある。

◎専日工三大学舞踏定期戦

(専修大学、日本大学、工学院大学)、学生競技会理想の形である。出場種手は一、二年生が殆んどであるが、審査は各校のOBによるというようにすべてが学生の手で行なわれている。

◎早 慶 戦

学生舞踏の元祖というべき古い歴史と伝統の競技会であり、毎年最後の競技会として注目されている。又男性が学生服でなくエンビ服を着て踊り、他の競技会には見られない華やかさを出している。

◎早慶同立舞踏選手権大会

(早稲田、慶応、同志社、立命館)、遠征試合。

◎東明新三大学ダンスフェスティバル

(東京、明治、新潟)、この競技会是新潟における唯一の学連の競技会で学生ダンスの地方普及および三大学の技術交換、親睦を目的としている。

◎中 洋 戦

(中央、東洋)、両校の親睦を主に新人の技術向上を目的として発足し、「すべて学生の手で」ということにおいて、審査員も、現役学生でやっている。

◎その他の地方競技会

- 全九州学生舞踏競技大会（秋）
- 福岡学生舞踏競技大会（春、秋）
- 工造戦学生舞踏競技大会（春）
- 名古屋学生舞踏競技新人戦（春、秋）
- 名古屋学生舞踏競技選手権大会（秋）
- 関西学生舞踏競技大会（春、秋）

連盟（学生舞踏）の抱える問題点

○学生舞踏の在り方について

早慶戦が始まった学生ダンスも25年の歳月が流れた。その間に学生パートナーの確立、学生のための学生による学生のための連盟作りがなされた。前述したように今や全国に5つの下部組織をもち、加盟校数200に及び、その発展振りは目覚ましいものがある。然し連盟の現状を見たときはたして手放しで喜んでばかりはおられない。即ち、折角、つくられたパートナー規定にしても短大卒生の一部は出場できることになっている。今すぐに実施できないとしても将来は「学生舞踏」の名の下、本当の意味の学生に限るべきであろう。その為多少の技術低下があろうとも止むを得ない。又、試合の際の服装であるが学生らしさ、或は経済的面から考え、男子の場合、学生服に統一すべきではなかろうか、同様に女子の服装もこの辺で再検討すべきであろう。

更に、部員は学生としての本分をも全うせねばならない。きくところによると、部活動が忙しいとかいう理由で留年し卒業できないという部員が多くの大学で目立っているそうである。部活動はあくまでも学業の余暇になさねばならない。この点猛省を促したい。

○教習所利用の問題

現在、殆どどの部員は教習所を利用し練習を行なっている。これは大きな経済的負担としてでなく、学生としてのクラブ活動から考えると非常に疑問に感ぜられる。各個人がばらばらに教習所通いということになると最早そこにはクラブ性は存在しない。あくまでも各大学の中で練習を行ない、上級生が下級生を指導する形をとるべきである。技術の点でどうしても外に依存せねばならぬ場合は、必要ならクラブにコーチを呼んで教えを乞えばよい。このことは連盟が積極的にとり組む問題であろう。はたして年間何万もの金を費やすのが学生のクラブ活動と言えるかなどの疑問もでてくる。部員の中には教習所に行く金がなくクラブを去る者も居ると聞く。この点、連盟は本腰を入れ、早急にこの問題解決に取り組むべきだろう。

○競技会の運営、回数の問題

現在、主な競技会は殆んどプロバンドを使っている。従って競技会開催の度毎に多額な費用を要している。そしてこれは直接に出場選手、参加校に負担となつてはね返ってくる。又審査の点も同様、プロ審査に依存している。現在学生の競技レベルが非常に高くなり、アマチュアによる審査では仲々むずかしくなつてきていると聞くが、更に検討し眞の学生による試合が行なわれることが望ましいのではなからうか。

次に競技会の回数の点であるが、シーズン中は殆んど毎週試合があり、レギュラークラスの部員の忙しさはとても筆では表わせない程である。余り試合が多いため悪い意味で試合慣れして眞の技術発表の場となっているか甚だ疑問である。もっと試合（競技会）数を減らし選手が充分の練習ができ、競技会を向上した技術の発表の場とすることが本来の姿ではないだろうか。そして前述したように競技会毎の多額の費用も問題である。学連が早急に考えねばならぬ一つであらう。

○組織の内部充実

現在、なお組織を詳細に検討すれば、未加入地区（中部地区、四国地区など）もあり、各地区別連盟組織に一段の強化をはかる必要もないとは言えない。しかし全日本学生舞踏連盟の組織拡張はほぼその使命を達した現在、今後望まれるのはその内部充実である。

○学連活動の進め方

学連が活動を進めていく上で一番の障害になっていることはダンスに対する社会の偏見と競技舞踏に対する認識不足であるといえよう。

これらの障害をのり越えて競技舞踏を社会に浸透させていくためには正しい普及広報活動が必要である。現在この活動は普及活動としてマスコミ班、広報活動としての新聞班により行なわれているが将来もこれらの二本立て活動を進めていくべきだろう。そしてそれにも増して大事なことは学連所属の学生自身が学生舞踏の在り方についてけんきょに反省しそれを行動の上に現わすことであらう。

結 び

以上「学生舞踏年の歩み」について学生舞踏競技の誕生、連盟の発足とその背景、六大学戦の開始と大学対抗戦、全日本学生舞踏連盟の再発足、そして現在、名実共に全日本学連にふさわしく生長した学生舞踏が抱える問題等について考察をすすめてきた。西欧社会の生活に密着している社交ダンスも、わが国では各種の偏見にさまたげられ、その正常な発達はかなり阻害されてきたが、学生舞踏連盟の着実、健全な歩み

によってかなり修正された、その点での学生舞踏連盟の果した功績は大きいといえよう。今後は社交ダンスの技術水準、マナーの向上において学生諸君兄弟の教養の裏付けある活躍がアマチュア舞踏会のリーダーたる気概をもって一大発展をもたらすであらうことを祈って筆をおく。

参 考 文 献

舞 踊 史	小林信次著	逍遙書院
ダンス入門	中山義夫著	
現代スポーツ百科事典	日本体協	大修館書店
機関誌「東舞」創刊号		東部日本学生舞踏連盟
機関誌「東舞」第2号		東部日本学生舞踏連盟
東部日本学生舞踏連盟新聞「東舞」		東部日本学生舞踏連盟
各大会プログラム		東部日本学生舞踏連盟
体 育 大 辞 典		